

男女共同参画推進施設に対するよくある疑問や誤解について、池谷さんに解説していただきました。

① 利用者・対象者は女性に限定されるの？

プラザの利用者や対象者は、女性に限定されるわけではなく、実際、男性の利用者や参加者も珍しくありません。女性を対象にした事業が多いのは、性差別が構造化された社会の中で、性別ゆえに困難を抱えたり不利な状況に置かれがちなのは女性が多いからです。また、性的マイノリティの施設利用はもちろん、性的マイノリティが抱える困難や課題の解消もプラザが取り組むテーマですし、男女平等社会の追求と性的マイノリティが生きやすい社会を作ること、二者択一ではありません。

さらには、SOGI (性的指向・性自認) だけでなく、外国人や障がい者、また、高齢者や若者など、プラザは多様な区民に広く利用される必要があります。プラザは「誰もが自分らしく生きること」を支える拠点施設であり、多様な利用者がいることで、多様な視点を生み出すことができるのです。

② ジェンダー課題の解決のために活動する人だけが利用できるの？

もちろん、ジェンダー平等の実現に向けて積極的に活動に取り組む区民には、ぜひプラザとつながってほしいと思います。しかし、そうした区民だけではなく、たとえば、ジェンダーはよくわからないけれど、自身が直面している困難に対処したい人、ジェンダーにもとづくイライラやモヤモヤを感じている人、興味はあるけど難しそうと迷っている人、さらには、すでに男女平等は達成された気がしている人、社会の変化と自分の「常識」にズレを感じて戸惑っている人など、区民の様々な関心を受け止める場としてプラザはあります。

また、プラザを利用する区民の自主活動は、必ずしもジェンダー課題の解決「だけ」に取り組んでいるわけではありません。文化を含む趣味の活動や、歴史や海外事情などの教養的な学び、スキルを磨く活動など、区民の自主サークル(プラザ登録団体)の活動内容は多岐にわたります。仲間とともに活動を楽しみながら、その中で役割分担や性別にもとづいて期待される言動を見直し、一人ひとりの得意分野を活かすことを心がけたり、文化や歴史の中で形成されてきたジェンダーに関する慣習を発見して掘り下げたり、自分とは異なる意見や考えと出会って話し合ってみたりすることが、ジェンダーを考える契機になります。自主サークルの活動には、暮らしの中からジェンダーの視点を育むことが期待されているのです。

称は、21世紀が男女平等社会に向かって大きく羽ばたくことをめざして付けられた。開設は2001(平成13)年9月だが、プラザの歴史をさかのぼれば、台東区に婦人センター建設を求める区民たちの取り組みが1970年代からあった。私たちは、今、その歴史の上にたつ。開設から今年度で23年目、プラザの「はばたき」の蓄積は四半世紀も間近である。この間、日本における男女平等推進は決して平坦な歩みではなかったが、最近ではSDGsを一つの追い風に「ジェンダー」という言葉が日本でも市民権を得つつある。

他方で、課題も多い。男女平等をめざす草の根の取り組みには世代間の断絶が大きい。若い世代を中心にジェンダー平等をめざす取り組みが活性化する今日、世代間の対話をいかに生み出すかは全国共通の課題だ。また、ジェンダー平等の実現に向けて、行政と区民がどのようなパートナーシップ(協力関係)を形成できるのかも問われている。さらには、複雑化する区民のニーズに応じるには専門機関としての調査研究とそれにもとづく事業構想が必要であ

り、そのための大学等ネットワークやプラザ職員の専門性確保も切に求められる。くわえて、長期計画と施策体系にもとづく男女平等推進分野は、全国どこでも同じような事業が展開される「金太郎飴」になりがちだ。しかし、ジェンダーは地域課題と深く関わる。たとえば台東区は、自治組織や祭りなど区民の努力によって伝統文化を継承してきた実績があり、それらは観光資源としてもますます重要になっている。だからこそ、誰かの我慢や犠牲の上に成り立つ文化を「伝統」として次世代に継承しないために、暮らしの中で感じた違和感

池谷美衣子さんプロフィール
東海大学スチューデントアチーブメントセンター准教授、博士(教育学)。専門は生涯学習・社会教育。
『ワークライフバランス時代における社会教育』(共著、日本社会教育学会編2021)、『女性たちが学ぶことの今日的な意味：国立市公民館における女性講座参加者の経験から』(共著、『社会教育学研究』No.54、2018)など。

特集 男女平等推進プラザ「はばたき21」をご存知ですか？

この問いに、「はい」と答えてくださる方を1人でも増やしたい!…これは、職員をはじめ、男女平等社会をめざしてプラザで活動する区民の皆さん共通の想いです。

そこで、多くの方にプラザを知っていただくために、今号は「プラザ大特集」として、前半では、区民によって組織されたプラザ運営委員会の委員長である池谷美衣子さんにプラザの役割などについて解説していただき、後半では、プラザが行っている各種事業を紹介することにしました。

気づき、学び、人…プラザにはいろいろな形の出会いがあります。身近な存在として、多くの方にプラザを活かしていただけるように、これからも様々な事業を推進していきます。

寄稿

ジェンダー平等な暮らしをつくる、あなたの一歩をプラザから

—台東区立男女平等推進プラザ運営委員会・委員長／東海大学—

池谷美衣子さん



あなたにとってのジェンダーとは

ジェンダーやセクシュアリティをめぐる様々な話題が、連日のように聞こえてくる。女性議員や女性管理職の数の少なさ、中学・高校で広がる制服の選択制、経口妊娠中絶薬の認可、芸能事務所での未成年者に対する性暴力報道、同性婚を認めないことへの違憲判決…。誰かにとっては、より自由で平等な社会に向かう変化であり、別の誰かにとっては、社会の「常識」を揺るがし不安と焦燥をもたらす変化かもしれない。あなたにとってはどうだろうか。

大きな話題に限らず、日常生活の中で、私たちはジェンダーに関わる価値観を言葉や行動で表現し、しばしば他者と不協和音を引き起こす。家事や育児などの分担をめぐる喧嘩

やイライラ、性別と見た目・ふるまいの関係について、世代間で顕在化する驚くような感覚のギャップ、そして、職場や地域社会で交わされる軽口の内容や当然視される習慣への払拭できないモヤモヤ…。「男だから／男のくせに」「女として／女なのに」「普通は／当然だ」といちいち主張しなくても、私たちは日々の言動を通じてそれぞれの価値観にもとづいたジェンダーを「実践」し、周囲に影響を与えあう。ジェンダーをめぐることは、誰ひとり、無関係ではられない。

男女平等推進プラザは何のために、誰のために

国連、日本、そして、ここ台東区は、誰もが性別に関わりなく個人として尊重され、自分らしく生きられる。くわえて、長期計画と施策体系にもとづく男女平等推進分野は、全国どこでも同じような事業が展開される「金太郎飴」になりがちだ。しかし、ジェンダーは地域課題と深く関わる。たとえば台東区は、自治組織や祭りなど区民の努力によって伝統文化を継承してきた実績があり、それらは観光資源としてもますます重要になっている。だからこそ、誰かの我慢や犠牲の上に成り立つ文化を「伝統」として次世代に継承しないために、暮らしの中で感じた違和感

ることのできる社会の実現をめざすと宣言してきた。台東区では、2014(平成26)年に「東京都台東区男女平等推進基本条例」を定め、現在は第5次にあたる「行動計画」が、2020(令和2)―2024(令和6)年度の期間、102の事業に具体化されて取り組まれている。
とはいえ、区民の暮らしは政策や事業で成り立っているわけではない。一人ひとりの生活課題は多様であり、性別にもとづく困難の経験やジェンダーに関心をもつきっかけもそれぞれだ。そこで、暮らしと政治をつなぎ、区民の立場から主体的に男女平等・ジェンダー平等を推進する拠点として「台東区立男女平等推進プラザ」(以下、プラザ)がある。
プラザの「はばたき21」という愛